

# みやけの風

## 第 125 号

平成 15 年 (2003 年) 5 月 24 日 (土) 発行  
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター  
 発行責任者：上原 泰男  
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階  
 東京ボランティア・市民活動センター気付  
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646  
 E-mail：tokyocenter@cmpp.org

「ふれあい集会に行ったかよ」「おうよ。天気が悪きゃあ、よそうかと思ってたっけが丁度いいあんばいでな。皆に会って来たよ」「五ヶ村ののほりもあって部落のもんにも会いやすかったけな」「だから。たまには遠くにいんもんとも会わねえとな。普段は機会がねえじよ」「やっぱりふれあい集会はよ、みんなに会えるちゅうことがいいよな」「おうよ。ボランティアも多かっけが、まあ良くやってくれんよな」「帰ったら島にも来てもらいてえもんだじよな」「帰れんだかよ」「いえ、俺に聞くなよ」

### みんなの声

#### 集会参加、ハンディーキャブ、 初めて尽くしの母の外出

この度、たくさんの方のお世話になり、避難以来立川市のホームで生活している母を、ふれあい集会へ参加させていただくことが出来ました。

もうすぐ帰島できると思いつつ、3年になろうとする今、母の記憶力が日に日に悪くなって行くのです。

ある時、フツと『ふれあい集会へ連れて行って、島の皆さんに逢わせてあげたい』という思いに駆られました。正直、遠距離な事や迷惑を掛ける事等色々不安でした。

当日、付き添いのためホームへ出向き、『さあ、ハンディーキャブで出発です』

発車、停止、カーブ。なんて優しい運転。母のトイレの心配や、乗車、下車に掛けてくださる運転手さんの言葉の優しさ、母の漫才のような会話に、にこにこつきあい、遠かった会場へ、あっと云う間の車の移動だった気がします。

ハンディーキャブでの移動は、私の心配ほど母の体の負担には成っていない様子で、会場で島の皆さんと会話し、食事をいただく母は、とても楽しそうで元気でした。

たとえ母がすぐ忘れたとしても、一緒に楽しい時間を共有することができ、とても嬉しく良かったと思っております。

ありがとうございました。

(稲城市 山本 徳子)

#### ふれあい集会雑感

6回目の島民ふれあい集会が終わりました。考えてみると、ほぼ半年に一度のペースで、これだけの規模の催し物が開かれる例にはないのではないのでしょうか。6回目ともなると、迎える方も迎えられる方も慣れたもの。それぞれ思い思いの参加の仕方楽しんでいたようです。

とは言え、運営の苦労は何度やっても減ることはないでしょう。今回も少しばかり裏方のお手伝いをしましたが、朝早くから日が暮れるまで動き回るスタッフの皆さんの活躍には頭が下がりました。会場のあちこちで再会を喜び合う島民の姿を見て、自分のことのように嬉しくなりましたが、スタッフの方にとっても苦労が報われる光景だったことを願っています。

そんな中、今回もっとも印象に残ったのは、最後まで会場整理に残ったボランティアの皆さんの、なんと若いことか、と言うことでした。

開催中には気が付きませんでした。多くの若い皆さんが参加し、集会を支えてくれました。今回ふれあい集会を通じて三宅島を身近に感じてもらえたであろうこうした若い方々の存在は、三宅島の将来にとってひとつの財産になりうるのではないかと思います。

「帰島が実現しても、私達には復興した三宅の姿を見てもらうことくらいしかお返しが出来ません」と挨拶された寺本社協会長の言葉が印象に残っています。お世話に

なった方々を招いて、三宅島で再会できたらなんと素晴らしいだろう、と思いながら会場を後にしました。(武蔵村山 築穴 律男)

### 島民作品展会場の感想ノートより

片寄さんの掛け軸の前で足が止まり、しおりも一枚いただきました。

“木遣太鼓”を聞きながら、皆さんがどんなにか「島へ帰りたい」と思っておられるか、「ここは私の家じゃない」と云うようなお気持ちでいらっしゃるか、今さら語るべくもないことではありますが、感じな

いではられませんでした。

「帰りたい！帰りたい！！帰りたい!!!」  
そうですよね。帰りたいですよね。「帰りましょう！帰りましょうよ！必ず帰りましょう！」

田中喜男さんへ

お元気そうですね。いつもごぶさたでごめんなさい。こうしてがんばって居ることを知り、とてもうれしく安心しました。島で会えることを楽しみにして、お互い頑張りましょうね。(足立区 田中米子・正一)

## 第6回三宅島島民ふれあい集会 無事終了しました！

雨!? 2003年5月18日(日)の早朝、港区立芝浦小学校では「第6回三宅島島民ふれあい集会」の準備がすすめられていた。そくそくとボランティアが姿をあらわしては空を眺め「くるかねえ」「いやいや逃げ切れるよ」などという会話を交わしていた。

940人の島民 午前10時、芝浦小学校前に列をなすようにして「はとバス」が到着してきた。その数15台。個別移送を利用した方も含めて今回の島民来場者は約940人。宿泊帰島と日程が重なってしまったため、来場者は比較的少なかったが、会場は楽しいそうな笑顔であふれた。

突然のゲスト 午前10時半、特設ステージでは恒例となった応援メッセージがあり、その後に三宅村長の詩を元にした曲をリリースする五木ひろしさんから声のメッセージが届けられた。その後ステージに上がったのは、4月まで都の三宅島災害対策の指揮を取っていた前東京都副知事青山侘さん。今回は「職を降りたからといって、もう三宅島に関わらないというわけにはいかない」「これからも蔭ながら...いや、蔭だけでなく表からも応援します」という宣言(?)に会場は拍手に包まれた。

最大のブース数 午前11時、ステージの「伊ヶ谷獅子舞」の舞と「神着木遣太鼓」の力強い響きが会場を激しく揺さぶり、それに煽られるように飲食ブースが忙しくなった。イベントブースも所狭しと並んでいる。その数、飲食・イベント計42ブース。

5カ村の旗 「であいの広場」と名付け

られた校庭中央の広場に、手作りの金太郎旗が5つ立てられている。旗には5ヶ村の名前がある。島民実行委員会でリクエストがあったからだ。各旗をあまり離さなかったのも幸いしたかもしれないが、旗の下には常に多くの島民の方々に溢れていた。

雨降らず、ガスはまだ 体育館プログラムの始まりを告げる島民合唱団「アカッコ」の歌声が会場に流れ始める頃、雲の隙間から光が射してきた。

体育館では、火山ガスとの共生を考えた上で重要とされる「リスクコミュニケーション」についてわかりやすいイラスト付資料を中心に報告があった。体育館は島民で一杯になっていた。三宅村からはクリーンハウスについて、映像を通し説明があった。

宿泊帰島をしていない島民の方にとって大いに参考になったのではないだろうか。

ふれあい集会後 舞台では、神着木遣太鼓の見送り太鼓が続き、出口では多くのボランティアによって花道が作られ、「お元気で」「お疲れ様」と声を掛け合いながら見送っていた。

午後6時、ボランティアが最後のミーティングのために輪になっていた。「島民の方々は集会が終わるとまた現実の生活が待っている。それを思うと涙が出る」と挨拶する方がいた。せめて集会中だけでも楽しんでもらいたい。そして、できることなら、今日の天気のように涙を降らさないように、島民に寄り添っていければと、僕は感じた。

(東京災害ボランティアネットワーク 福田 信章)